

目的 近年 各家電メーカーが独自に開発したそれぞれ特徴のある新水流で、洗濯容量を大型化した洗濯機が市販されている。各メーカーとも洗浄力の向上、被洗物の劣化の抑制、使用法の簡易化などを宣伝している。果たしてどの程度性能が向上しているか、消費者サイドからの検討が必要と考え一連の実験を試みてきた。前回報告の「洗濯容量と洗浄効果」に引き続き、本報では、数種の新水流洗濯機の機械力による被洗物(平織布とタオル)の劣化を検討した。

方法 洗濯機：8種(槽式6種、全自動2種)。被洗物：①平織綿・レーヨン布(JIS-L-0803 添付白布用の綿とレーヨン) ②タオル2種(浴用とフェイスタオル)、①②とも補助布として $90 \times 90 \text{ cm}^2$ 綿布使用。洗浄条件：洗剤0% (機械力のみを考慮)、各洗濯機の標準水流で、洗液の温度 $30 \pm 2^\circ \text{C}$ 、10分洗浄、すすぎは常温で2分を2回。浴比は、①の平織布の場合は、洗濯機ごとに水量を高水位にとり、被洗物重量によって1:12~15(メーカー側が表示している値浴比での洗濯物の8割)、1:20, 1:25, 1:30の4種として浴比による収縮率及びほつれ率を求めた。②のタオルの場合は、水量を中水位にとり、1:20のみで洗濯を30回繰り返し行い、洗濯回数による収縮率、洗浄減量及び風合いの劣化について比較検討した。

結果 ①平織布の場合、綿・レーヨンとも大部分の洗濯機で低浴比又は1:20での収縮率が、1:25, 1:30よりわずかに大きくあらわれる。ほつれ率については1:30の方が大きい。また②タオルの場合は、収縮率及び洗浄減量とも繰り返し洗浄5回までに大きくあらわれ、その後はわずかな変化にとどまる。各洗濯機間に見られる被洗物①②の性能劣化も傾向はほぼ同様であった。